

《 2024 年会報に替わる 菖翁生誕 250 年記念図録の配布 》

今年は松平定朝（菖翁）生誕 250 年に当たる年でした。これを記念して都立神代植物園では、特別企画展が開催され図録が出版されました。この図録には新しい知見が盛り込まれていて、話を聞いた会員からは入手を希望する声が多く寄せられました。これを受けて臨時役員会を開催して、「図録を一括購入して、2024 年会報の代わりとして全会員に配布する。」ということとなりました。今回配布の図録は以上の経緯や趣旨により配布するものです。

以下に本図録の中でのいくつかのトピックスについて紹介します。

〔 トピックス 1. 江戸にもあった愛好団体「菖花連」 〕

「連」とは江戸時代、武士中心に結成された花の愛好団体です。花菖蒲界では熊本の「十六夜会（明治期に満月会に改名）」が有名ですが、同時代の江戸にも「菖花連」がありました。今後、さらなる文献調査が必要ですが、菖翁花の継承に菖花連が関係していた可能性も考えられます。菖翁の花菖蒲品種目録には『花菖蒲花銘』、『菖花譜全、二』がありますが、『菖花譜二』で使用された用語や「松平家種」という断り書きより、菖翁没後、「菖花連」がこの品種目録作成に関わっていたことも考えられます。（図録 P15、P51 参照）

〔 トピックス 2. 新たに見つかった菖翁花「王照君」 〕

『花菖蒲品種総目録』には菖翁作「王昭君（六英咲）」と「王照君（牡丹咲）」の 2 種の記載があります。従来は前者「王昭君」（特徴的な瑠璃色を帯びる六英咲）が一般的に周知されていましたが、協会本部による品種確認作業の中で「王照君」（牡丹咲）が発見されました。名札だけではなく花器を分解して精査したところ、「宇宙」と同じ牡丹咲（花卉化した雌雄蕊がある）の構造をしていることが確認されました。牡丹咲の「王照君」は『花菖蒲花銘』に、瑠璃紺色六英咲の「王昭君」は『菖花譜二』に記載されていますので、菖翁作の 2 品種の現存が判明しました。今後は二文字目の漢字表記に注意して下さい。

（図録 P13、P33、P51 参照）

〔 トピックス 3. 「酒中花系」から分離された菖翁花「霞の波」 〕

同名異種が混在する酒中花系の中で、会報第 49 号、51 号で紹介した「酒中花」〔小高園株〕は、昔から堀切地域で菖翁花であると伝承されてきた株です。『小高園銘鑑』（1936）や『花菖蒲入門』（1973）でも菖翁花とされ、昭和 40 年代までは「宇宙」に次いで高額販売もされていました。解剖して見ると花器官の基本構造が「宇宙」と同様に、外観の花容や弁厚で花持ちの良い点などを総合して見ると、やはり菖翁花であると考えられます。

何故かこの名は菖翁の品種目録にはありませんでしたが、最近、『花菖培養録草稿』に「霞の波」の図画が見つかりました。この「霞の波」が小高園株の満作時の花に一致するようです。（図録 P36）このことから、菖翁没後に「霞の波」の名が失われ、小高園に渡った時には「酒中花」という品種名に入れ替わっていた可能性を指摘される方もいます。

『色分け花図鑑 椿』によると、「酒中花」の名は、酒宴の遊びに由来するようです。菖翁の命名は武士の教養である漢学が基本にあり、そこに自然、文物に対する畏敬の念が重なっており、娯楽要素の強い酒中花とは馴染まないように思えます。菖翁花ではない「酒中花」の代表は図録 P33 にある「酒中花系」の株が有力です。

文責：清水 弘